

## 近代的興行を確立

おおたに たけじろう

大谷 竹次郎 (1877-1969)

松竹ほか



松竹株式会社提供

### § 人物データファイル

#### 出生

明治10年（1877）12月13日、京都三条柳の馬場（現・京都府京都市）で父栄吉、母しもの次男として生まれる。兄松次郎とは双子児である。京都では「事始め」と称するめでたい日に生まれたのでこう名付けられたという。祖父は薩摩藩の家中であったが、わけあって京都で暮らすこととなったと伝えられている。父栄吉は幼い時に、旅館を営んでいた大谷家に養子に出されやがて花相撲（本場所以外の相撲興行）で働くことになった。そして花相撲の水場（売店）の株★を持っていた西村熊吉の娘しもと知り合い結婚した。

#### 生い立ち

相撲興行にしたがってあちこちを転々とする貧しい暮らしが続くが、明治18年（1885）祇園花見小路にできた祇園座の水場の株を祖父西村熊吉が購入。一家をあげてその仕事を手伝うことになり、定まった場所で商売ができることとなった。竹次郎も兄と共に、京都市立有濟小学校での学業の傍ら両親を助けて働いた。明治23年（1890）1月の祇園座改め祇園館の開場興行は、東京から九代目市川團十郎一派を招き、大阪の初代中村鴈治郎がんじろうと組み合わせた大舞台だった。働きながら観たこの舞台に大きな衝撃を受けた兄弟は、芝居の興行を志すようになったという。

#### 実業家以前

明治25年（1892）には父が新京極の東向座の水場の権利を手に入れ、さらに劇場の金主★になった。明治28年（1895）には同じく新京極の阪井座きんしゅの金主にもなった。父栄吉は東向座の時から、金主になっても興行に直接

関与することはなく、竹次郎を代理とした。兄松次郎はこのころ父の手元を離れ、同じ新京極の夷谷座の水場の権利を持っていた白井亀吉のもとで働いていた。松竹では竹次郎が興行界の第一線に立ったこの明治28年（1895）を創業の年としている。

## 実業家時代

明治30年（1897）兄松次郎は白井亀吉の次女と結婚し、白井家の養子となり、弟竹次郎が大谷家の家督相続権を持つこととなった。大谷は徴兵検査の結果数ヵ月入隊し、この間は兄が代わりに阪井座等の経営にあたった。これが白井・大谷の協力事業の始まりである。明治32年（1899）阪井座を譲り受けるが、老朽化の為興行の許可がおりなかったので、折よく売りに出されていた祇園館の建物を買い取って移築し、歌舞伎座と改称して翌年開場する。明治34年（1901）には賃貸借り受けをしていた常盤座が焼失したのに続き、父栄吉が死去する。兄弟は常盤座の再建に全力を注ぎ、座主となり明治35年（1902）の1月には明治座と改称して開場にこぎつける。この開場を祝う大阪朝日新聞の記事「松竹の新年」（1月3日付）をきっかけとして、松竹合名会社という名称を使用し始め、松と竹を組み合わせた社章も作られた。明治座ではこれから10数年にわたって新派俳優・静岡小次郎と提携していくこととなる。

この頃までの興行界は、上演時間は不規則なうえ、利益関係も複雑で、様々な悪習慣が横行していた。その打破を目指す演劇改良の運動に兄弟も賛同し、新しい行き方を自分たちの興行で実行している。

明治37年（1904）12月には初代中村鴈治郎が初めて歌舞伎座に出演する。これを機に両者は関係を深め、鴈治郎は京都への出演を重ねる。明治39年（1906）2月には道頓堀の中座を借り受け鴈治郎一座の直営興行を行い、大阪へも進出を開始した。また12月には京都の南座を買収して改築し直営とした。この後明治41年（1908）には道頓堀の朝日座、翌年には大阪文楽座も買収し、着々と足場を固めていく。文楽座は寛政年間から続く人形浄瑠璃の専門劇場だったが、経営は苦しかった。しかし二人は文楽を存続させるため損得を抜きにして経営を引き受けた。

明治43年（1910）に東京の新富座の売り出しの話が舞い込み、過労のため病中であった兄に代わって大谷が取りまとめ、上京した。毎月の興行すなわち生活の安定を求める新派俳優が彼に協力し、新富座の改築を進める一方、新派の拠点であった本郷座を買収し直営とした。また築地に松竹合名会社東京事務所を開設し、この年から大谷竹次郎が東京、白井松次郎が大阪という体制ができた。

明治44年（1911）1月、社名を松竹合名社と変更。この年の3月に帝国劇場が開場し、座席はすべて椅子席、切符制度や新聞広告、ポスター等を取り入れた新方式が、興行界に新風を吹き込んだ。翌45年には女優ブームがおき、松竹でも女優養成所を設立している。9月には市川左団次（二代目）が松竹専属となり岡本綺堂らの脚本を得て興行を行う。そして大正2年（1913）10月、大谷は歌舞伎の殿堂、歌舞伎座の経営を任される。

また大衆芸能でにぎわっていた浅草六区にも進出し、吾妻座、御国座などを経営した。活動写真（映画）にも興味を持ち、末弟の白井信太郎（白井松次郎の養子となっていた）、劇作家の松井松葉などを欧米に視察に行かせた後、大正9年（1920）2月、松竹キネマ合名社を創立した。これ以後「しょうちく」という呼称になる。さらに翌10年（1921）帝国活動写真株式会社（大正9年11月創立）を買収し松竹キネマ株式会社と改称のうえ、松竹キネマ合名社を吸収した。またこの年には歌舞伎座が全焼。再建途中の大正12年（1923）9月に関東大震災が発生し、歌舞伎座だけではなく京浜地区の傘下の劇場、映画館、事務所、住まい等を失ってしまう。大谷は再興に努力し、大正14年（1925）1月歌舞伎座の再建が完成し、来賓約5000人を招いて開場式が行われた。

昭和3年（1928）7月には初の歌舞伎海外公演を実現し、10月には東京松竹楽劇部が創設され、レビューへの取組みが本格的に始まった。12月には松竹興業株式会社を創立し、松竹合名社東京事務所の所有する劇場、経営権全てを継承した。翌4年（1929）には不況で借財を背負った帝国劇場を10年間の契約で経営することになった。また松竹合名社大阪事務所が株式化を行い、松竹土地建物興業株式会社となった。この両社は昭和6年

(1931)に合併し、松竹興行株式会社となった。昭和11年(1936)には蒲田から大船に撮影所を移転し、更に昭和12年(1937)には松竹興行株式会社と松竹キネマ株式会社が合併して松竹株式会社となる。大谷が社長となり、ここに東西の松竹演劇、映画が統一された。

昭和に入ると、東京の演劇・映画・レビュー界のほぼすべてを松竹が掌握していたが、やがて小林一三が創立した東宝がその座を脅かすようになる。東宝は多くの劇場を建設し、帝国劇場も傘下に収め、松竹から俳優を引き抜いて東宝劇団を結成した。両者は昭和16年(1941)に相談役交換という和解策を講じる。戦争中も上演は続けられたが、昭和20年(1945)1月には松竹本社は焼夷弾の直撃を受け、大谷は爆風のため鼓膜を損傷、空襲により歌舞伎座をはじめ多くの劇場が焼失し、多大な損害を被る。戦後GHQは歌舞伎に対して厳しい上演制限を行い、しばらくは映画は採算が取れるが演劇は赤字という状態が続く。やがてマッカーサーの副官で今日歌舞伎の恩人と呼ばれるパワーズの尽力もあって上演制限は撤廃され、昭和26年(1951)1月にはついに3度目の歌舞伎座再建を成し遂げる。この年には国産初のカラー映画も公開している。昭和29年(1954)松竹株式会社長になり昭和35年(1960)には歌舞伎の渡米公演、翌年にはソビエト公演を実現させた。昭和37年(1962)再び社長、翌38年会長となる。またこの年には文楽を財団法人文楽協会の手に乗ねることとし、松竹所有の人形、衣装、台本等その他一切を無償で譲渡した。この後は、歌舞伎、新派、新喜劇が松竹演劇の主な柱となった。なお歌舞伎の海外公演はこれ以後もハワイ、ヨーロッパ、カナダへと続いた。

## 社会・文化貢献

文化勲章を受章したのを記念して、財団法人松竹大谷図書館を設立し、昭和33年(1958)に開館。松竹が収集・所蔵してきた資料を広く一般に公開し、研究者や愛好家の利用に供して、芸術文化の振興と、社会文化の向上発展に寄与することを目的としている。

また大谷の死後松竹は、昭和47年(1972)にその業績を記念して大谷竹次郎賞を制定した。この賞はその年に上演された新作歌舞伎脚本、新作舞

踊劇脚本の最優秀作に贈られる。

## 晩年

昭和44年（1969）12月27日、会長職に在職のまま、東京三田の自宅で慢性腎臓炎のため死去。享年92歳。翌年1月9日に築地本願寺で松竹社葬。白井と同じ京都の東大谷墓地に葬られる。

## 関係人物

**白井松次郎** 双生児の兄白井松次郎は昭和26年（1951）1月23日に75歳で没するまで、主に関西方面の興行を担当し、大谷と助け合い、ともに松竹の事業を築き上げた。初代中村鴈治郎を擁して関西興行界を制覇し、明治42年（1909）には文楽座の経営を引き継ぎ、興行の改革を進め、再興した。大正9年（1920）には東京に先駆けて松竹楽劇部創立、大正12年（1923）千日土地建物株式会社社長、昭和6年（1931）松竹興業社長、昭和7年（1932）大阪歌舞伎座開場、昭和13年（1938）松竹株式会社会長。

## エピソード

大正4年（1915）8月7日、日光の中禅寺湖でボートが転覆し、長男の栄次郎が14歳で死去した。大谷の嘆きは深く、仕事をやめようと決心するほどであった。しかし俳優や演劇関係者など周囲の人々の温情に、演劇という仕事あってこそ自分の自分への支持であると思いを新たに仕事に邁進した。ただ、ちょうど上演中であった、水を使用する『怪談乳房榎』という演目は自分の生きている間は松竹で演じることを封印してしまった。

## キーワード

**水場の株** 花相撲などの相撲興行では、売り子が品物を持って場内を歩き、見物客にお茶やたばこ盆、座布団などを貸したり売ったりするビジネスが付きもので、「水場」と呼ばれていた。誰がどの興行で水場を請け負うかは一種の利権となっており、その権利を「株」と呼んでいた。

**金主** 興行の資金を出すスポンサー。収益から経費を引いた利益を得る。複数で出資することが多く、出資比率に応じて分配する。芝居の内部でも尊敬され、権力も強く興行面全般に干渉した。

## 神奈川との関わり

『葉山町郷土史』（p99）によると、大谷は昭和8年（1933）に葉山町堀内1173に別荘を構えている。松竹は昭和9年（1934）に大船駅東側の土地7万坪を購入し（その他2万坪を大船町から町の発展のためとして寄贈される）、撮影所建設用地以外の6万坪を宅地として、松竹映画都市株式会社より分譲した。

昭和11年（1936）1月に大船撮影所が開所し、平成12年（2000）に閉鎖するまでの64年にわたり、ここであまたの名作が生み出された。

また昭和25年（1950）1月付で松竹はプロ野球球団「松竹ロビンス」を発足させる。この年見事セントラルリーグで優勝するが、以後低迷し、昭和28年（1953）には「大洋ホエールズ」と合併。現在の横浜DeNAベイスターズの前身となった。

## § 文献案内

### 著作

大谷は生前様々な雑誌に執筆しているが、図書として現在確認できる主なものは以下のとおりである。

『歌舞伎劇雑考（社会教育パンフレット197）』大谷竹次郎著 社会教育協会 1933～1934（未所蔵）

『私の履歴書2』 日本経済新聞社 1957（Y、K）

聞き書き。後に『私の履歴書 経済人1』（日本経済新聞社 1980（K））に収録された。

『歌舞伎の話（アルプスシリーズ57）』大谷竹次郎著 商工財務研究会 1957～1958（未所蔵）

同じ内容と思われるものが『アルプス叢林1』（稲田善昭編 アルプス 1964（未所蔵））にも収録されている。

### 社史

松竹の社史においては大谷の業績は歴史編において記述されている。

『松竹七十年史』 松竹 1964 〈Y、Yかな、K〉

昭和37年（1962）大谷竹次郎の提案により着手し、2年をかけて作成された。執筆編集は田中純一郎。田中は映画評論家、映画史家。後に『日本映画発達史』全5巻を著し、日本映画ペンクラブ賞を受賞している。創業から昭和38年（1963）までの松竹株式会社の歴史を収録している。現況編・歴史編・資料編の3部構成からなり、歴史編において、大谷及び兄白井の奮闘が記述されている。松竹の歴史がすなわち大谷・白井兄弟の歴史であることがうかがえる。資料編には松竹開始以来の演劇・演芸興行記録、松竹映画作品記録、松竹洋画輸入興行記録、松竹映画輸出作品一覧、各種映画賞受賞作品一覧、松竹歌劇公演記録、松竹製作テレビ映画一覧、松竹年表が収められ、日本近代の興行史を知るための貴重な資料となっている。

『松竹八十年史』 松竹 1975 〈Y、Yかな、K〉

執筆・編集は『七十年史』と同じく田中純一郎が担当。昭和49年（1974）までを記述の範囲とし、『七十年史』刊行以来の10年分を詳しく記し、『七十年史』収録分はダイジェスト風に再録している。資料編には主な俳優の配役、映画スタッフ名も新たに加え、松竹上演の全演劇・映画の題名索引を添えている。

『松竹九十年史』 松竹 1985 〈Y、K〉

執筆・編集は田中純一郎が担当。従来通り現況編・歴史編・資料編の3部構成だが、『八十年史』刊行以来の10年分を追加し、読み易くするために歴史編の多くの部分を会話体に改めている。

『松竹百年史』 松竹 1996 〈Y〉

本史及び演劇資料、映像資料の全3巻からなる。『九十年史』まで編纂にあたってきた田中純一郎は平成元年（1989）に死去している。『松竹七十年史』を基本にしてその後を加筆するだけでなく、新発見の資料を加え、誤謬を正し、新たな観点から編集している。なお本稿・人物データファイルの記述は本書を主な典拠としている。

『松竹百十年史』 松竹 2006 〈Y〉

明治28年（1895）～平成17年（2005）末までを記述の対象とする。現況編・歴史編・資料編の3部構成。既刊の社史を基にまとめ、新たに平成8年以降の記

述を加えている。

『歌舞伎座百年史』 松竹 1993～1998 〈Y、K〉

本文篇上巻下巻及び資料篇の全3巻。設立前史及び明治22年（1889）11月の開業から昭和20年（1945）5月に戦火で焼失するまでを上巻に、復興前史（昭和20年5月～25年）及び設立100年（昭和63年）までを下巻に収録。大谷の業績は本文篇上下巻にわたって記述されている。資料篇は本興行のみでなく短期興行も含む上演年表（明治21年～昭和63年）である。

『松竹関西演劇誌』 日比繁治郎編 松竹編纂部 1941 〈未所蔵〉

白井松次郎の指示により作成された。京阪神の各座の明治期以降の上演記録を中心とし、演目別索引も付いている。

## 伝記文献

『大谷竹次郎演劇六十年』 脇屋光伸著 大日本雄弁会講談社 1951  
〈未所蔵〉

『大谷竹次郎』 田中純一郎著 時事通信社 1961 〈Y〉

『百人が語る巨人像・大谷竹次郎』 「百人が語る巨人像・大谷竹次郎」  
刊行会 1971 〈Y、K〉

大谷没後追悼集として刊行された。生前の大谷を知る百名の人々が、自分たちの目に映ったその姿をつづっている。巻末に付録として「松竹兄弟」（渡辺霞亭著 国風書院 1922）の復刻、年譜、写真（大竹省二撮影）等を収録。

「松竹 演劇興行を実業化した大谷竹次郎」 宮西好夫著 『日本の「創造力」10』 日本放送出版協会 1993 p415-428 〈Y〉

## 参考文献

『松竹映畫都市株式會社分讓地附近圖』 松竹映畫都市 1934 〈Yかな〉  
「神奈川との関わり」欄参照。

『葉山町郷土史』 葉山町 1975 〈Yかな〉

『レビューと共に半世紀』 松竹歌劇団編 国書刊行会 1978 〈Y〉

『幻の田園都市から松竹映画都市へ』 鎌倉市中央図書館 2005 〈Yかな〉

『歌舞伎座物語』 中川右介著 PHP研究所 2010 〈Y〉



## コラム 実業家と美術館（2）

「ブリヂストン美術館」「サントリー美術館」等のように企業名がついていると、企業が創設した美術館だということがわかりやすい。しかし、実業家の名前を美術館の名称にしている場合、一般の公立・私立美術館との判別がつきにくい。

例えば、「根津美術館」「五島美術館」「大原美術館」「太田記念美術館」「せんおくほくこかん泉屋博古館」。どこの企業の美術館かわかるだろうか。

**根津美術館**（港区南青山・昭和16年設立）は、東武鉄道の初代根津嘉一郎が、東洋美術が欧米へ流出するのを防ぐために個人の趣味という枠をこえて蒐集した古美術品をもとに、2代目根津嘉一郎（1913-2002）が設立した美術館である。**五島美術館**（世田谷区上野毛・昭和35年設立）は、東京急行鉄道株式会社の五島慶太が、収集したコレクションを広く公開し、社会・文化の発展に寄与することを願って設立した美術館である。また、倉敷に行ったら、とりあえず**大原美術館**（岡山県倉敷市・昭和5年設立）に立ち寄るといふ人も多いだろう。この美術館は、画家児島虎次郎の死を悼んだ倉敷紡績2代目社長の大原孫三郎によって設立された日本最初の西洋美術中心の私立美術館である。**太田記念美術館**（渋谷区神宮前・昭和50年設立）は、東邦生命保険会社の第5代・太田清蔵（1893-1977）が、江戸時代末期から明治時代にかけて膨大な数の浮世絵が欧米に流出したことを嘆いて収集に努めた浮世絵を公開した、浮世絵専門の美術館である。**泉屋博古館**は、住友家が蒐集した美術品を保存、展示する美術館で、東京・六本木と京都・鹿ヶ谷にある。この美術館の名称は、江戸時代の住友の屋号「泉屋」と青銅器図録『博古図録』からとったものである。